

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年7月2日(金)

その3

◇ 「全校体育」で見えたもの①～至誠の姿勢～

子供たちの「いい姿」を、「力を養った姿」を、「心身を鍛えた姿」を保護者の方に見ていただいた【全校体育】であった。



話を聞く児童の姿。中央に位置する赤帽の1年生は、朝礼台方向に正面を向く。体操座りが様になってきたばかりか、動かない。入学式からの一番大きな成長だ。彼らも頑張っているが、我慢を支えるのは上級生の姿。雰囲気を感じる1年生。

向かって1年生の右側に位置するのは2年生。座る姿から、「姿勢を正そうとする意識」がはっきりと伝わってくる。

前から3番目のH君の姿勢は、特に素晴らしい。足を組めば座禅の形。これを教育者の森信三もりのぶさう氏によれば、【腰骨を立てる】という。1年生とはたったの1学年の違いの2年生だが、何気ない姿や佇まいに学年の差が明確に現れる。

顔がカメラ方向にあるのは、やや斜め方向に体の向きを変えているものによる。

その右側が4年生。右端のS君の体の向きは、2年生よりもさらにぐいっと中央に向く。これは、意識していないとできない。言い換えれば、「意識の表れ」だ。

私は、「腰を下ろしなさい」との指示のみ。「話ができる姿勢をつくりなさい」とか、「体をこちらに向けなさい」とは言っていない。でも、普通にできる。

これは【高めた意識(心の力)と身に付けた力(良識)】の表出であると考える。

※良識>>>常識

5・6年生は、推して知るべし。別格である。

これまで、朝会（全校集会）などの話を
する場面で、昨年度の臨時休校明けから継続し
て伝え続けてきたことがある。

壇上に立つ。

まず初めに子供たちに伝えることは、
「臍(へそ)を、こちらに向けなさい」。
「体を向ける」ではなく、**【臍を向ける】**であ
る。

中学生が相手ならば「体を向ける」でも通
ずる。**【臍を向ける】**としたのは小学生向けの
言い回し。行為を具体的に示すことで「話し
手に体を正対させる」ことをねらいとしてい
る。

併せて教室の机の配置を変えた。

常に教壇の教師に**【臍が向く】**よう、児童
は机の向きを整えて授業を行っている。

つまり、

【心の向きを正対させる】ということだ。

○話を聞くときは、相手に正対。

○授業中は、教師に正対。

継続してやっていると、ふつうにやれる。

継続してやっていると、それが**【あたりま
え】**になる。

【あたりまえ】になると、無理がなくなる。

無理がなくなると、心がこもる。

心がこもると、本物に近づく。＝ **【至誠】**

開会式。子供たちが腰を下ろしたあと、朝
礼台の方向にさっと身体を向けた行いが自
然に見えたのは、「臍を向ける **【至誠の姿勢】**
が本物になりつつある証」なのである。

